

# 労働に社会評価を

社会福祉法人アルプス福祉会  
コムハウス施設長 金澤洋一

今年1月に「松本がもし100人の村だったら」という絵本を発行しました。池田香代子さんの有名な「世界が100人の・・・」のパクリです。もちろん池田さんにはメールで了解（むしろ応援）をいただいて松本の仲間たちと1年かけて絵本にしました。下記がその内容です。

松本には228, 415人の人が住っていますが、もしもそれを100人に縮めたらどうでしょう？

<もしも松本が100人の村だったら>

女の人は51人で、男の人は49人です。

お年寄りには21人いて、その中で介護の必要な方は3人います。

子どもの数は15人です。

男の子が8人で、女の子は7人です。

外国籍の人は2人です。

今年産まれた子どもは1人です。

この村でも目が見えなかったり、耳が聞こえなかったり、身体が動かなかったり、全てのことが大切に思えてすぐやる  
ことが決められなかったり、回りのことが気になってしまい生活のしづらさを感じている人がいます。その人たちにこ  
の村は障害者手帳を渡しています。

手帳を持っている人は5人です。

障害を持っている人は  人います。

皆さんの周りには・・・

<もしも松本が100軒の村だったら>

この村には58軒の1～2人世帯があり、

32軒は一人暮らし世帯です。

この村ではほとんどの人が会社からもらったお金で暮らしています。

農業を行い暮らしている人は9軒です。

そのうち3軒は自分たちが食べる分を作っていて、

お店などに売っている農家は6軒です。

その中でお米を作っているのは5軒で、

野菜も作っているのは3軒です。

りんごやぶどうなどの果物を作っているのはたったの1軒です。

この村は果物や野菜作りではとても有名な村なのですが・・・。

この村には乳牛が1頭、肉牛が2頭と豚が1頭います。村人の倍もの二ワトリが飼われていますが、牛乳や豚肉、卵をお店に出しているお家は1軒にもなりません。

すべての世帯に車（4輪車）があります。しかも1世帯に約2台もあります。

そのうち25世帯にはオートバイもあります。

この村の中を、たくさんのバスが走っています。

村役場へ、病院へ、温泉へ…

でも、このバスに乗る人は1日に8人です。

となり村の山の麓へ、小さな電車が走っています。でも、この電車に乗る人は1日わずか1人…。

この村の中心に、都会へ続く鉄道の駅があります。この駅から1日6人の人たちが電車に乗って出かけます。

<もしも松本のお店が100店だったら>

この村の2店は大型店舗と言っても大きなお店です。そして、そのお店は街中にはなくて、

この村の人たちは安いものを買うために車で遠くのお店まで出かけます。

<もしも松本の小学生が100人だったら>

学童保育に行っている子は16人います。

1ヶ月以上続けて学校を休んでいる子は1人ですが、中学生になると5人に増えます。…高校生になれば、どうなるのでしょうか？

就学援助金をもらっている子は11人もいます。お父さんやお母さんは一生懸命働いていますが、今は不景気で生活は厳しいのです。

60年前の松本村は、村の予算の3割を教育のために使っていました。今は1割ちょっとしか使っていません。いったい何にお金をかけているのでしょうか？

でも、松本村の子どもたちは、この60年間でとても身体が大きくなりました。

6才の男の子は身長が6cm、体重が3kg、

女の子は身長が7cm、体重が3kg

14才の男の子は身長は14cm！体重は11kg！！

女の子も身長が8cm、体重が7kgも大きくなりました。

<もしも松本の中学生が100人だったら>

松本村の中学生は、卒業すると就職する人もいますが、98人は進学します。

60年前は、42人は就職して進学する子は57人でした。

100年前にこの村は出来ました。

そのときは7人でした。

そのあと、何度も近くの村と一緒にあって、

今のような大きな村になりました。

また、となり村と一緒になるかどうかを

考えているところです。

この村ではごみを年間480キロ出しています。

1人が毎日、約1.3kgのゴミを出しています。(これは実数です。)

その8割が可燃ごみです。

可燃ごみを少しでも減らすとCO2が削減できます。

この村でも地球温暖化は村人の生活に影響してきています。

この村では38年前には子どもが22人いましたが、

今は15人です。

この先12年後にも15人はいると思われます。

一方でお年寄りも38年前に9人いましたが、

この先12年後には28人になります。

この村では1年の間に1人の人が亡くなります。

また、来年に1人赤ちゃんが生まれるので、

しばらくは100人の村が続きます。

この絵本は今、松本ではちょっとした話題となっています。この絵本の中では「障害のある方は5人となっています。池田さんの「世界が100人の村」では7人、北欧では10人と言われています。民族や地域で障害者の数は変わりません。ではなぜ違いがあるのでしょうか。それは、その国やその地域の認知度や制度・仕組みによる差なのです。松本の市バスですが1日の利用は8人となっています。経営不振の中で昨年バス料金が変更になり、利用はますます減少しています。誰もが病院や役場へ安心して通えるためには必要なサービスに行政の予算が投入されてなんらおかしくないと思うのは私だけでしょうか。北欧では町の中心に弱者の施設があり、企業はその周りに位置しています。しかし、日本では町の中心は企業が独占していて、お年寄りや障害者の施設は町外れにあるのがほとんどです。この絵本をきっかけに松本のあちらこちらでこんな話をさせていただいて回っています。

★私の職場である「コムハウス」の紹介をしておきます。

コムハウスは2008年に知的障害者通所授産施設から多機能型事業所（就労移行支援・生活介護事業・重症心身障害児者通園事業B型を併設）に移行しました。

コムハウスでは就労移行支援の方も生活介護事業の方も重心の方もそれぞれが可能な範囲で幾つかの作業を取り組みながら（クッキー・ふきん・薪・施設外就労・リサイクル事業・麦ストロー・下請け作業・工芸品・紙すき・などなどおそらく作業種はこの近隣では一番多いのではないのでしょうか？コムハウスには46の方が通所されています。46人が働くわけですから本来46種の作業があってもおかしくないと思います。）賃金アップに努めてきました。結果、コムハウスは平均では12000円程度の賃金が出せています。重心の方は1週間で働ける時間に限りはありますが、わずかながらもお給料を手にした時にこの上ない笑顔を見せてくれます。障害程度区分の平均が4以上の方々がほとんどの施設ですので、決して高いとは言いませんが健闘していると自負しています。

★選択できる事の大切さ

Nさんとの旅行する機会があって、外出に出かけました。

「さて、何を食べようか？」

「ステーキがいいなあ」

毎回の会話です。いつどこへ行っても希望を聞くとNさんは「ステーキ」を希望します。確かに肉はおいしいのですが、毎回同じリクエストなのです。

今回は本人の意とは別に焼き鳥屋ののれんを潜ったのですが、本人は初体験だったそうで、すごく喜びました。「はじめてきた」「うまい」の連発でした。身体障害と知的障害を併せ持ったNさんと赤提灯は連想しにくいものではあると思います。外出といえばファミリーレストランしか経験がなかった事が、その後の会話の中でわかりました。

私にも覚えがありますが、子どもに「好きなものを選んでいいよ」と言いつつも、いつまでも決められないで子どもが嬉しそうに悩んでいると、いつしか待てなくなってきてしまいます。「ご注文は？」などと係りの人が来ようものならば、「早くしなさい」と言わんばかりに「お前はハンバーグだね」と勝手に決め付けてしまいます。一見「ステーキがいいなあ」と自己選択をしているように聞こえますが、選択肢が用意されていないとすればそれは自己選択とは言いません。

利用者たちに選択の出来ることがどれだけ保障されているのでしょうか？

〇〇の下請け作業はNさんの好きな仕事と担当職員は言いますが、本当に好きなのでしょうか？一番我慢ができる作業であるのかもしれませんが。

障害者だから・・・ではなく選択できる機会がどなたにも提供されることが大切です。

★たかがお給料ですが、それで変わる人生もある。

工賃が全てではありません。しかし、工賃で人生も変わることも有ります。どこにチャンスやきっかけがあるかを私達は見失ってははいけません。Kさんはこの外部就労で工賃が3倍になりました。今までお給料をもらっても全て管理は母親任せでしたが、4万円になってから自分のお金が出来てから経済感覚が芽生えたようです。

ある日、施設で販売していた T シャツを買いに事務所に来ました。買いに来たところか値切りはじめました。原価1300円のものだったのですが、「500円にしてください」と言ってきたのです。値切られたことはとても嬉しいことでした。最終的に900円で売ることにしました。

コムハウスに通所されている方のほとんどは知的障害者ですので、計算がとても苦手です。ほしいものは欲しくて、値切るとか比較するのは苦手だと私たちは思い込んでいましたが、Kさんは変わりました。内向的な利用者さんでしたが自己主張が少しずつできるようになって来ました。

昨年 Kさんは就職をしました。過去に就労の経験を持っていましたが、いじめられたのをきっかけに一般就労を長く拒否していました。母子家庭でしたが、お母さんが80代になり、最近足腰が弱ってきていてKさんが母の介助をしていました。

「いっぱい働いてお給料をたくさんもらいたい」

「就職してお母さんを楽にしたい」と願うようになりました。

面接を受けて、トライアル雇用の末、正式採用の打診が施設に入ってきました。ところが、母親が拒否をしたのでした。

「コムハウスにずっと置いてやってくださいな」

「またいじめられるに決まっている。うちの子は馬鹿だから、だめですよ」

母親の反対を聞いてKさんは職員に電話をしてきました。

「反対されている、何とかして！」

職員が駆けつけるとKさんはすでに泣いていました。

「働きたい！」

「親の言うことが聞けないのか！そんな子は出てお行き！」

「働きたいの！」

Kさんの心の叫びでした。生まれて初めて親に逆らった日でもありました。Kさんは数日間グループホームに身を寄せて、その間母の説得で職員は3日間をかけた。

今では月に13万円くらいのお給料です。3万円から4万円を家に入れていますが、それ以外は自分に使ったり、貯金をしています。

Nさんは麻痺が会ってうまくお話ができないのですが、携帯電話が欲しくて欲しくて仕方がなくて携帯電話を購入をしました。「も～ し～も～し～ あ の～ ～」と話すものですからたいした会話はしていないのですが、購入してしばらくは実家に長電話

をするものですから1ヶ月の使用料が2万円にもなっていました。Nさんは携帯電話でメールが出来るようになって自分のお給料の範囲に自分の活動が収まったときから経済感覚が芽生えました。ひとりひとり違うけれど、その時を見失わないことが大事です。変わりたい、変わろうとしているタイミングです。

★お給料は社会評価であり、お金を渡しているのではなく、社会からの評価を手渡しているのだと考えます。

授産活動をすればするほど売りに左右されがちです。利用者たちがクッキーを納品に市内のお店を回ってきますが、お金を受け取ると嬉しそうに私にお金を持ってきては納品の報告してくれます。

「今日こんなにもらったよ」

利用者さんたちは納品の仕事が好きです。車に乗ることと、お客様に直面するのがとてもうれしいのです。お客様に商品を届けることは結果の出ることであり、仕事を完結させることになりますから。何よりも料金を手渡せてもらえるのです。しかし、金額ではなくて、「ありがとう」「コムハウスのクッキーはおいしいね。」「今回もよくできているよ」「またお願いね」とお店の方に言っていただくともっとやる気になるものです。お金はその額面に値する商品であると認めていただいた表れだと職員には言います。単なるお金で済まさないように評価されているのだと利用者が思える関係づくりや仕組みを創るのが私たちの仕事です。

★私たちの仕事は利用者の仕事を社会化させることである。

コムハウスでは古紙回収をしています。施設の駐車場にコンテナがあり、地域の方が自由に持ち込んでくれます。利用者たちはそれを業者に持ち込んでお金に換金してきます。松本市はリサイクル還元金として補助金を業者の伝票を添付した申請に基づいて施設に振り込んでくれます。

この仕組みが始まったのは行政との懇談の中から「ごみ削減に施設が何ができるのか」と言った発想からでした。市内の作業所・施設6箇所でリサイクル集積所を設置しました。同時に松本では買い物袋の有料化にも踏み切りました。松本のごみの量は右肩上がりが増え続けていたのですが、昨年からは横ばいになりました。可燃ごみの大半は紙類だそうです。紙のほとんどが燃やされると灰になります。灰は最終産業廃棄物です。松本の灰を埋め立てる処分場はあと28年でいっぱいになるそうです。28年後には新たな処分場の設置が必要になるのですが、ごみが増え続ければもっと早く次の手当てが求められますし、少しでも伸ばせられれば市の財政に大きな貢献にもなります。古紙の回収をコムハウスの利用者がすることで28年後の市の財政を支えているのだと利用者や地域の方々に伝えていきます。今、小学生の子達が親になるころの市政です。次世代への貢献でもあると言えます。コムハウスで取り組んでいる作業は「ほかし」があったり、

「薪」がありますが、どれもエコ活動にリンクしています。作業に誇りや達成感を位置づけることが大切です。また、同時に地域にその中身を丁寧に伝えることがなくてはなりません。利用者やその労働を施設の中に囲わないことです。

仕事は報酬とやりがいと人間関係だと考えます。施設は通過点であると考えた場合、報酬のみを追求してはいけません。働く力や意欲を育てることも大切です。しかし、報酬が伴わないでは話になりません。このバランスはその施設ごとによって違うものでしょう。障害の区分や特性によって変わるものだと思います。

アルプス福祉会という法人は施設を作るための運動を市民立で行いました。「どんなに重い障害がある方でも通える働く場」に賛同してくれる人は1000円寄付してくださいと地域に訴えて6500万円集まりました。今でも後援会には300名ほどの方が会費を納めてくれています。多くの人の応援でできた施設なのでいつでも見学などは受け入れますし、研修や実習も受け入れています。近隣の学校からは総合学習のカリキュラムにコムハウスでのボランティアが定着しています。中学を卒業した子が「私、福祉の進路を選んだよ。〇〇学校に受かったよ」と報告にきてくれたりするとこちらまで嬉しくなります。

応援団が多いので仕事もいろんな提案がやってきます。「麦ストロー」もそのひとつです。地元出身の歌手「上条恒彦」さんの紹介でジブリ美術館ハストローを納めています。「すいにくいのが自然でいい」「ビニールのごみになるものではなく自然の素材がカフェ麦わらぼうし（美術館のお店）のコンセプト」と宮崎駿さんからも評価をいただいています。最近では大手企業からも引き合いが来ていますが全国チェーンなので対応できる素材（麦）が2年後の収穫まで望めません。近隣の大学や農協と無農薬の麦畑について話し合いを始めています。